

# 高齢者疑似体験による高齢者のイメージと高齢者理解の変化

—看護学生の高齢者イメージの自由記述の内容分析から—

相羽 利昭      山村江美子      板倉 勲子

聖隷クリストファー大学看護学部

## A Descriptive Study Examining the Changes of Nursing Students' Perceptions Toward the Elderly via Virtual Reality

Toshiaki AIBA    Emiko YAMAMURA    Isako ITAKURA

Seirei Christopher College, School of Nursing

### 抄 録

高齢者疑似体験前後に、高齢者のイメージが変化するか、また高齢者をどのように理解したかを明らかにするために、看護学生の自由記述50例を内容分析した。その結果、疑似体験前後では高齢者のイメージに変化はなかった。また疑似体験後には、【イメージをまとめ老化現象（知識）と関係づける】、【関わり方を思案する】、【高齢者の境遇に目を向ける】、【学生自身の老化を慮る】、および【高齢者の身になって見る】という高齢者を理解する（認知）レベルから態度（情意）のレベルへと変化していた。このことは疑似体験を実施した意義があったと考える。

キーワード：高齢者疑似体験，高齢者のイメージ，高齢者理解

## 1. はじめに

わが国は、諸外国に比類のない速さで超高齢社会を迎えつつあり、65歳以上の人口の構成割合は2001年では18.0%であったが2015年には26.0%になると推計されている<sup>1)</sup>。一方で、核家族化が進み、高齢者と接する機会の少ない若者が増えている。看護学生もその例外ではない。このような状況では、看護学生は、卒業後に高齢者の看護に携わる可能性がきわめて高い。また高齢者の特徴を理解しないままに臨地で実習しても教育効果が期待できないという問題に直面する。そのため、看護基礎教育に高齢者の疑似体験が導入され、1990年代には、その教育効果に関する報告が見られるようになった。この多くは、疑似体験が高齢者理解につながると報告している<sup>2)-5)</sup>。

本学でも高齢者の疑似体験を導入し、その教育効果を検討し報告した<sup>7)</sup>。そこでは、疑似体験後は高齢者理解につながっていたものの、その前後で高齢者のイメージに変化がないとの結果が現れた。しかし、サンプルが20例であったことと学生がどのように高齢者を理解したかを明らかにしていなかった。

そこで今回は、サンプル数を増やして疑似体験前後のイメージの変化の有無を再検討する。また学生が疑似体験後にどのように高齢者を理解したかを明らかにする。さらにそれらから、高齢者の疑似体験を行うことの意義を検討することにした。

なお、ここでいう「高齢者のイメージ」とは、学生が高齢者と聞いて思い描く高齢者像をいう。

## 2. 研究方法

本研究の対象は、看護大学3年次生103名のうちの50名の記述である。この記述は、老人看護方法論の全ての講義を終了した後、高齢者体験スーツを着用（疑似体験）した後に、疑似体験前後の高齢者のイメージについて自由記述を求めたものである。疑似体験に用いた高齢者体験スーツは坂本モデル社製「お年寄り体験スーツ」である。

まず、高齢者のイメージに関する分析の手順は次の通りである。①学生の記述内容を疑似体験前と後を2名の研究者が別々に精読した。②記述内容を研究目的に照らしながら内容分析を用い、高齢者イメージのテーマを導いた。③現れたテーマを抽象化してカテゴリー化した。そして、④体験前と後でカテゴリーを比較した。

次に、どのように高齢者を理解したかを分析した。分析の対象は、疑似体験後の学生50名の記述である。分析方法には内容分析を用いた。分析の手順は、2名の研究者が別々に精読し、テーマを導いた。

テーマならびにカテゴリーの信憑性の確保には、まず2名の研究者各々が、学籍番号の早い順に同じ30例の記述内容を分析し、現れたテーマを持ち寄り検討した。そして同様の手順で1例ごとに分析を重ね、50例目でも新たなテーマが現れなかったため、ここで分析を終了した。次に、1週間後に再検討し、さらに討議しながらテーマの信憑性を高めた。その次に2名の研究者でカテゴリー化した。そして、現れたテーマとカテゴリーを研究歴のあるもう1名の研究者からスーパーバイズを受けた。

倫理的配慮は、学生に対してあらかじめ匿名性を確保した上で、記述内容を分析し学会などに用いることの承諾を得た。

### 3. 結果および考察

まず、高齢者のイメージに関する学生の記述の分析結果を述べる。

#### 1) 疑似体験前後の高齢者のイメージ

##### (1) 疑似体験前の高齢者のイメージ

まず、高齢者体験スーツ着用前のカテゴリには、6つが現れた。それは、【弱い】、【ゆっくり】、【保守】、【穏やか】、【豊か】、そして【個々の差】であった。

【弱い】は、身体の弱さを示し、体が弱い、腰が弱い、骨が弱い、視力や聴力の低下、病気を持っている、寝たきりになりやすいといった内容が記述されていた。主として身体的・生理的機能の低下を内包している。

【ゆっくり】は、動きや口調についての動作に関することと、時間がかかる、やればできる、あるいは反応に時間を要するといった時間に関することの2つについて記述されていた。

【保守】は、伝統に固執、マイペース、意思を曲げない、頑固、自分を変えようとしない、動こうとしない、意欲の低下、前向きでないといった、今を保ち変化しようとするイメージが記述されていた。

【穏やか】は、穏和、温かい、および優しいといった性格に関するイメージが記述されていた。

【豊か】は、経験や知識の豊かさがイメージとして記述されていた。

【個々の差】は、同じ年齢でも老化に違いがある、人によって頑固であったり優しかったりする、あるいは動こうとしない人もいれば運動したり仕事をしている人もいる、といったように高齢者は個人差が大きいことをイメージしていた。

これらのカテゴリの中心には、「良くないイメージ」と「良いイメージ」が混在し、その多くは「良くないイメージ」であった。【弱い】、【ゆっくり】、および【保守】は、主に「良くないイメージ」として記述され、一方【穏やか】と【豊か】は、「良いイメージ」として記述されていた。そして【個々の差】には「良くないイメージ」と「良いイメージ」が並行して記述されていた。

以下に学生の記述例を示す。

学生11 行動がゆっくり。弱々しい。たよりなく思うときがある。おおらか。体の機能の低下。足取りがおぼつかなかったりと、見えて少し危なっかしい。耳が遠い。

学生12 今までは、高齢者は腰が曲がっていて、動作がゆっくりとしたイメージだった。そのため、自分にゆとりがあるときには、優しく接することが出来たが、余裕のない時には、動作がにぶく、のろのろしてるのでとてもイラついてしまった。知識は豊かであり頼りになる存在ではあるが、高齢者は、体力がなく、つかれやすい。また、目が見えにくく、耳も遠く、言葉が通じないので、意志疎通が大変である。食事に関しては、病院でアルバイトをしているせいか、口からぼろぼろとこぼしたりむせたりし、口にものを運びにくそうなイメージだった。

学生24 動作が遅く、耳が聞こえにくいため、何度も同じ事を聞いたり、言ったりするという全体的にとらえたもので具体的にどういいう状況におかれているのか、それぞれがどのように影響しているのかというイメージがなく、漠然としたものだった。

学生34 高齢者によって人それぞれだけれど、私の高齢者観・高齢者像は……私にとっての高齢者は何十年も生きて生きてさまざまな経験をへている、人生における大先輩のような存在。頼りになる、と共に、そのぶん頑固になっていて、自分の意志をなかなか曲げないし人の話を聞かない一面がある。

学生44 動作はゆっくりで、歩行時はすり足で歩き、また、できるだけ動きたがらない。色々なことに対しての意欲がだんだん低下してくる。しかし、一方では、今までの長い年月を生きてきただけあり、さまざまな知恵が豊富である。

これら学生のもつ高齢者のイメージは、菱沼ら<sup>8)</sup>が9つのカテゴリー、つまり「身体的特徴からのイメージ」、「知的・心理的・性格の特徴からのイメージ」、「社会的役割と社会との関わりからのイメージ」、「生活者としての視点からのイメージ」、「時間軸でとらえたイメージ」、「人生の価値や生きがいに関するイメージ」、「自分との関わりからのイメージ」、「全体像を描いたイメージ」、および「その他」を挙げており、カテゴリーの命名は異なるものの同様であると考えられる。なお菱沼らの報告の「その他」には個人差が大きいというイメージが含まれている。

また、疑似体験前のカテゴリーは漠然として具体性に欠ける印象を受ける。これは、先に示した学生の記述例のように、単語が羅列され、単文で、そしてまとまりのない文章が多かったことにも関係していると考えられる。このことは、学生のもつ高齢者のイメージが漠然とし明瞭でなかったり、あるいは統合されていない可能性がある。

さらに、高齢者のイメージは高齢者との接触体験によって変化する可能性があるとの指摘もあり<sup>9)</sup>、特に大谷ら<sup>10)</sup>は高齢者との会話頻度が高かったり、祖父母では肯定的なイメージになると報告している。従って、高齢者との接触体験が少ない学生が、「良くないイメージ」を記述した可能性がある。

## (2) 疑似体験後の高齢者のイメージ

次に、高齢者体験スーツ着用後のカテゴリーは、【体験前とイメージに変化なし】の1つだけであった。50名の記述のうち7名がそう記述していた。それ以外の学生の記述は、イメージについての単独の記述はなかった。このことは、疑似体験は、高齢者のイメージに変化をもたらさない可能性が高い。しかし、千田<sup>9)</sup>は、疑似体験によって否定的イメージから肯定的イメージに変化したと報告しているので、結果に相違があると考えられる。一方で、高齢者のイメージに変化を来さないとする研究報告は見あたらない。このことは「イメージ」ということばの概念が異なる可能性も考えられ、「イメージ」の概念規定とそれに基づいた再検討が必要であろう。

## 2) 疑似体験を通した高齢者に対する理解

次に、学生が疑似体験を通して高齢者をどのように理解したかを述べる。

記述内容の分析から、高齢者の理解には、【イメージをまとめ老化現象（知識）と関係づける】、【関わり方を思案する】、【高齢者の境遇に目を向ける】、および【学生自身の老化を慮る】があった。これらの中心に、【高齢者の身になって見る】があった。

## (1) 【イメージをまとめ老化現象（知識）と

### 関係づける】

まず1つ目の【イメージをまとめ老化現象（知識）と関係づける】は、学生なりに関連のありそうなくつかのイメージをまとめ、老化現象（知識）と関係づけていた。あるいは老化現象（知識）を根拠に高齢者のイメージを説明していた。

学生の記述は次のようである。

学生3　高齢者というと、〇〇できないとか、〇〇してとかよく言っている。私は、甘えて誰かにさせようとしていると思ったけど、本当にできない。やると負担になることがわかった。高齢者が自分の世界に入りきっているように見えるのは、耳が聞こえにくかったり、視力が低下することによって、閉ざされてしまっているからだということがわかった。周りに気づかないのは、これらの老化によって感覚機能が低下しているからだともわかった。

学生38　すべてのことは老化にともなう障害がかかわり、高齢者の特徴を生み出しているのだとわかった。例えば、物静かやおだやかなのは、耳が聞こえにくく、周りからの疎遠からくるものではないかと思う。ここから、疎外感や孤独感が生まれるのであろう。野外を歩くのでも、視野が狭く視界が悪い。そして、歩くにも足が重いので、外へ出ることの不安や恐怖があるだろう。

### (2) 【関わり方を思案する】

2つ目の【関わり方を思案する】は、疑似体験を通して得た高齢者観に基づき、学生なりに高齢者とどう関わればよいかを考えたことがらが記述されていた。

学生11　私たちと対等であるということに気づいた。その上で、高齢者ができるようになれたらいいと思うようになった。知識をたくさん持っている人として尊敬することは大切だが同情はしないようにしようと思う。高齢者が弱音をはくのも、うるさいと思っていたが、体力が低下していくことをうけとめながら生きていくことはとても大変なことであるため、それを考慮し、私たちは、支えていかなければならないと思った。

### (3) 【高齢者の境遇に目を向ける】

3つ目は、【高齢者の境遇に目を向ける】である。これは、学生が高齢者の心境や状況に目を向ける、あるいは向けようと努力している様子が記述されていた。

学生28　とても弱くて守ってあげなくてはならない存在だと思う。思うように体が機能しなくて、思うように事を進められないもどかしさは、周囲の人よりも誰よりも本人が一番感じているはずだ。「年だから…」とよく笑いながら話しているが、自分でその状況をきちんと認めて、受け入れている。その状態で、できることをきちんとこなそうとしている前向きな感じだ。長く生きて、様々な経験をしてそのときそのとき、色々感じてきた糧があるからこそ、そのようにできるのだと思う。まだまだ未経験事が多い私たちの世代に突然、同じような現実があったら、とても受容できないと思う。そう考えると、高齢者はとても素晴らしい、尊敬できる対象になる。敬って、色々教えてもらって、たくさん吸収できる、人生の先生なのだと思う。

(4) 【学生自身の老化を慮る】

4つ目の【学生自身の老化を慮る】は、この疑似体験から学生自身が加齢していくこと、あるいは高齢者になった時のことをよくよく考えている内容が記述されていた。

学生10 老化とは徐々に進行するものなので（壮年期→老年期に至るまで）なかなか気づきにくいものなのかなと思った。（急にお年寄りになったので分かったが）私自身年をとることに不安はなく（自然なこと）受けとめていこうと考えている。

学生24 何もせずただ生きていくだけなら簡単だけれども、出来ることのなかから、やろうと思えること、やりたいと思えるような刺激を持って年をとっても楽しめる人生でありたいと思うようになった。

学生26 自分もいずれはこうなるんだよなあと、当たり前のことを思った。食べ物をボロボロ落として汚いとか、いつまでも口の中でもぐもぐしてるとか、それだけの視点だけでなく、高齢者からの視点を実感できたので、工夫することもできるなと思った。自分の未来の姿だから、自分だったらこう暮らしたい、こう生活したいという基本的な視点ができた。

(5) 【高齢者の身になって見る】

この【高齢者の身になって見る】は、高齢者の疑似体験をすることによって、今まで高齢者を外から眺めていたが、高齢者の身になって外を見る方向に視点が変化した。

学生12 弱々しい、たよりないと、見た目

から思っていたけれど、自分の体がだんだん思うように動かなくなっていくという辛いことをうけとめて、おおらかに明るく生きていられる高齢者はとても強いと思った。毎日がんばって生きているようには見えなかった（のんびりしているように見えた）が、毎日頑張って体力をつかって生きているのだと思いました。

学生45 今まで、高齢者の動作に対していらいらすることもありました。しかし、実際に自分が高齢者になってみて、心の中で思っている、考えていても、身体がそれについてこれないということを実感することができて、……行動や動作が遅くても、ただ単にのんびりやっているのではなく、身体の高齢化に影響されて、精一杯努力していることがわかった。

以上が、高齢者疑似体験を通して学生が高齢者をどのように理解したかの結果である。この結果は、柳原<sup>4)</sup>、柿川<sup>5)</sup> および宮地<sup>6)</sup> が、疑似体験による理解は、感覚的な理解から、加齢現象（機能低下）が心理・精神的側面に影響していることを理解し、高齢者への接し方や看護師としての援助方法を考え、そして学生自身の老いを考えるという方向に変化したと報告していることから、これらの報告を支持していると考えられる。

また、疑似体験前には学生の中で高齢者のイメージ1つ1つがつながっていなかったものの、疑似体験を通して学生は、まず【高齢者の身になって見る】、そして【高齢者の境遇に目を向ける】といった高齢者に対する見方が変化した、【イメージをまとめ老化現象（知識）と関係づける】、そして看護者として【関わり方を思索

する】ことをして、さらに【学生自身の老化を慮る】ことをしていた。これは、看護学生が高齢者を理解するためのプロセスではないかと考えられる。さらに【イメージをまとめ老化現象（知識）と関係づける】中にも、プロセスがあるように思われる。しかしながら、これら現れた5つの理解の内容がどのように関連しあっているかは、今回明らかにできなかった。

### 3) 疑似体験の意義

以上の事柄から、疑似体験の意義を次のように考える。

高齢者との接触体験の少ない学生がもつ高齢者のイメージは、疑似体験前には漠然としていた。その後、疑似体験という実体験によって、【イメージをまとめ老化現象（知識）と関係づける】、【関わり方を思案する】、【高齢者の境遇に目を向ける】、【学生自身の老化を慮る】、および【高齢者の身になって見る】という高齢者の理解（認知）のレベルから態度（情意）のレベルへと変化が見られた<sup>12)</sup>。このことがまさに疑似体験を行う意義と考えられる。

## 4. 結論

今回の結果では、疑似体験による高齢者のイメージには変化がないと考えられる。疑似体験による看護学生の高齢者の理解は、疑似体験後には、高齢者のイメージをまとめ、高齢者の身になって見る見方にシフトし、そして高齢者に対する援助の必要性和援助方法を思案するようになった。これらから、疑似体験によって理解（認知）のレベルから態度（情意）のレベルへと変化をもたらしたので、疑似体験を行う意義があったと考える。

今後、疑似体験によって、看護学生は高齢者

の理解をどのようなプロセスを経て理解していくかを検証していく必要がある。また疑似体験がその後の臨床実習でどう役立っているかを検討したうえで、疑似体験の具体的な方法（例えば、課題の与え方、疑似体験の時期など）を検討し、そして疑似体験の教育の効果をも評価していく必要があると考える。

## 5. 文献

- 1) <http://www.dbtk.mhlw.go.jp/toukei/youran/dta13/1-04.htm>
- 2) 高柳智子, 丸橋佐和子, 高山成子, 上原佳子 (2000) : 看護学生の高齢者疑似体験による学習効果, 日本老年看護学会第5回学術集会抄録集, p40.
- 3) 末永好美 (2001) : 老年看護学における対象理解のための体験学習, 高齢者疑似体験学習を取り入れた老年看護学教育, 平成11,12年度私立大学等経常費補助金特別補助研究成果報告書 (研究代表者: 有馬千代), 4-12.
- 4) 柳原清子 (2001) : 高齢者疑似体験で看護学生が感じた生活能力と高齢者理解, 高齢者疑似体験学習を取り入れた老年看護学教育, 平成11,12年度私立大学等経常費補助金特別補助研究成果報告書 (研究代表者: 有馬千代), 19-36.
- 5) 柿川房子, 石川睦弓, 佐藤敏子, 甲斐衣津子, 中野正孝 (2000) : 老年看護授業展開—高齢者疑似体験学習に関する検討—, 三重看護学会誌, 3 (1), 175-182.
- 6) 宮地緑, 赤木知子 (1993) : 老人看護学演習における老いの体験学習, 看護教育, 34 (11), 865-870.
- 7) 相羽利昭, 山村江美子, 板倉勲子 (2001) : 高齢者体験スーツ着用 (疑似体験) による教

- 育効果－看護学生の高齢者観・イメージの記述の変化から－，日本老年看護学会第6回学術集会抄録集，p44.
- 8) 菱沼典子，太田喜久子，小山真理子，清真佐子（1995）：看護学生の高齢者のイメージについての一考察，看護教育，36（8），730-735.
- 9) 千田みゆき（1997）：疑似体験演習による高齢障害者に対する看護学生の認識の変化，埼玉医科大学短期大学紀要，8，19-35.
- 10) 大谷英子，松木光子（1995）：高齢者イメージと形成要因に関する調査研究（1）大学生の高齢者イメージと生活経験の関連，日本看護研究学会雑誌，18（4），25-38.
- 11) 前掲9)
- 12) 日本医学教育学会監修，日本医学教育学会教育開発委員会編（1979）：医学教育マニュアル 1.医学教育の原理と進め方，28-44，篠原出版，東京.